

# ナッシュのソング「悪疫の時に」・私註

松 下 千 吉

## I

なっしゅ「悪疫の時に」(*In Time of Pestilence*)とらう題で呼ばれているトマス・ナッシュ(Thomas Nashe, 1567-1601)のソング(原詩の全文は後註に引用)は、彼の韻文劇(verse play)『夏の遺言』(*Summer's Last Will and Testament*)の終幕ちかくで歌われるソングである。この劇は、一五九二年の晩夏から初秋の頃に、当時ナッシュが寄寓していたカンタベリ大司教ウィットギフト(Whight)の館(ロンドン南郊のクロイドン Croydon にあった館)で、大司教や客人たちの前で上演するために書かれた一種の祝祭劇(holiday play)であるが、ナッシュ自身もプロローグの中でことわっているように、本格的な劇というよりは、むしろ演じ物(show)といった方がよい性質のものであった。

その年の夏はとりわけ暑い夏で、テムズ河の水も枯れて、ロンドン・ブリッジのあたりでは河底を歩いてわたることができたという。暑さと水枯れにも関係があったのであろうか、その夏はいわゆるペスト(the plague)が流行して、ロンドンを中心とした地域だけでもずいぶんたくさんの方が死んだという記録がある。ナッシュの劇

は、題名も示すとおり、夏の終焉という季節の推移を、ペストによる死と見立てて、そういう構成の中で、表面では当時の世相風俗を軽妙洒脱に風刺する一方、内面では、当時の人々の生にたいする熾烈な愛着と、その愛着の底にひそむ深い死の意識を描き出している。

エリザベス朝の劇の多くがそうであるように、この劇にもいくつかのソングがおりこまれている。なかには、地唄、俗謡に類するものもあるが、純粹に抒情詩といえるものの代表は、

Spring, the sweete spring, is the yeres pleasant King,

Then bloomes eche thing, then maydes daunce in a ring...

春よ、美わしい春こそは、ひととせの喜びの王様、

ものみなは花をぎ、乙女らは輪になつて踊り歌う……

てはじおほソングと、そつて、

Adieu, farewell earths blisse,

This world uncertaine is ...

やうば、地上の幸らふ

今生はまこと常ならず……

ではじまるソングであるが、前者は後に「春の歌」(Spring)と呼ばれ、後者は「悪疫の時に」と呼ばれるようになった。

すでにのべたように、『夏の遺言』では、疫病による死の暗さが思想の底流をなしているにもかかわらず、表面はむしろ、喜劇という副題の示すとおり、軽快な筆致が流れている。上にあげた二つのソングは、それぞれにこの劇の対応する二つの音調を代表しているといえる。春の歌は、思想も音調も、単純素朴で明るく、C・Sルイス(C. S. Lewis)が評したように、「ほとんどおろかなほどの楽しさ」がその主調であるのに対して、「悪疫の時に」は、思想も、そして(弱強調三詩脚アイアムビツクと強弱強調二詩脚クリートツクが微妙に交錯する)音調も、深くて、暗い。

## II

「悪疫の時に」は、抒情詩としての質の高さと、その湛えている深い悲哀が、現代人の好みにあうためであろうか、とくに今世紀にはいってから、心ある人々の注目をひき、それまでは「春の歌」ほどには詩選に収められなかったこのソングが、幾つかの詩選にも収録されるようになったが、それというのも、つぎにあげる第三聯が抒情詩として異色の光彩を放っているからにほかならない。

Beauty is but a flowre,

Which wrinkles will devour,

ナッシュのソング「悪疫の時に」・私註

Brightnesse falls from the ayre,

Queenes have died yong and faire,

Dust hath closed Helens eye.

I am sick, I must dye :

Lord, have mercy on us.

美しきものの命は花に似て、

寄る皺に食ひ荒されて朽ちはてん。

光は空より落ちて消ゆ。

美しき女王ら若くみまかりぬ。

土泥はヘレンの眼を埋めたり。

われは病み、わが命きわまりぬ。

主よ、われらを哀れみたまえ。

ところで、この第三聯は、とくに第三行“Brightnesse falls from the ayre.”の暗示的なイメジの含む意味をめぐって、少なからぬ評釈を集めたのであるが、ここでは代表的と思われる三つの評釈をとりあげて、それを中心にして多少の私註を加えてみたい。とりあげるのは、いずれも詩人・批評家である人々によるもので、評釈の年代順にあげると、W・エンプソン(W. Empson)、C・デイ・ルイス(C. Day Lewis)、J・V・カニングム(J.

V. Cunningham)の三人であるが、便宜上、初めにルイスの『詩的心象』(The Poetic Image, p. 35, 1947)のなかの評釈をとりあげてみよう。

ルイスは、まず、問題の第三行のイメージを、日没のときの空の光の凋落・消失と解釈する。そして、この第三行と次行の“Queens have died young and fair.”との間には論理上の空白(rational void)があるのだが、その空白は、光の凋落する夕暮れの落莫たる悲愛感と、女王たちの時ならぬ死にまつわる悲哀感とが、お互いに反映しあう聯想、すなわち感情の論理(emotional logic)によって充たされるのみならず、この情緒的な聯想は、夕暮れとか女王の死とかいう特定の情況を超えて、死に憑かれている人間一般の普遍的な境位にまでおよぶという。ルイスの解釈がより情緒的であるとすれば、エンプスンの『曖昧の七つの型』(Seven Types of Ambiguity, p. 26; 1930)における解釈はより知的・分析的である。エンプスンは、あの第三行が、意味の不明確さ(vagueness)のゆえに多様な意味の含蓄(ambiguity)を獲得している詩の一例であるとして、彼一流の分析を試みる。彼はまず、光(brightness)を具象的な光と非具象的な光とに分けて考える。具象的な光として考えうるものは、「ひととき光り輝いた後に地の下を過ぎゆく(Gass)太陽や月」、「時ならず落ちゆく流れ星」、「天にむかって昇ろうとして、力尽きるか息たえるかして、落ちるアイカラスとか鷹の餌食」、「十六世紀の当時、建物の頂上につけられたキラキラと回転する物の落下」(風見や十字架の類であろうか)などがあり、さらに「別の意味から、鷹や稲妻や、隕石などが、一閃して天から地上のものがけて降りかかる(fall upon)」場合も考えられるという。これら具象的な光る物の場合、第三行が前後の文脈とどういう意味でつながるかについては、エンプスンはとくにことわってはいないが、おそらく、落日のように平常のことであれ、流星や稲妻のように時ならぬことであれ、あるいは、アイカラスのように不本意なことであれ、これら光る物の落下は、花や人の命の自然または不時の凋

落を聯想させるといふ点で、前後の文脈に結びつくのであろう。

一方、非具象的な光としては、大別して二つの場合を考えている。一つは、光は本来天にあるものであって、「それが散乱・反射しつつ空から落下するのは天の恩寵として授けられる」のである。そのように、地上のあらゆる善美なるもの、たとえば女王の美も、「本来人間にそなわったものではなくて、神からのつかのまの恵みであり、それらはあのマナ (mana) のように急に降ってきて、たちまちに消え失せるのだ」という意味である。

ところで、「(とくに薄明のときのように) 空が地上より明るい限りにおいては、光は本来あるべき空にあるのだが」これが逆になる場合を考えることから第二の意味が生れる。すなわち、「空の雲が暗くて地上が明るいという限りにおいては、雷鳴の気配があるときは明りが空から地上に落ちてゐる」のである。これは文字通り天変地異の兆候であつて、「あらゆるものは無常である、天 (the Heavens) すらその光が定かならぬのだから」といふ意味になる。そして、この雷雲の重苦しい感じからさらに聯想をすすめて、「今ベスト流行のときには、大自らの恩寵が不思議にも断たれ」、ナッシュの劇が上演される「大司教邸における明るい祝祭の場面ですら、大気は一抹の暗さで穢されている」、という考えも読みとれるという。(この聯想は、おそらく、往時の人々がベスト流行の一因として空気の汚穢おぼろを考えていたことをも、ふまえているのではなからうか。)

エンプソンは以上のような所説を展開したあとで、最後にもう一つの読み方をつけ加えている。すなわち、ナッシュは実は、air、と書いたのではなくて、hair、と書いた(かまたは書くつもりであつた)のだという皮肉な説のあることに言及して、「髪」と読むとすれば、若さの象徴である光沢が凋落したという意味になるが、それは、「空」と読む場合よりは「想像力ではいささか劣るけれども、きわめて適切であつて」、「従来の読み方とはとんど同じ暗示力があり、しかも単一直截な意味を浮彫りにしてくれる」という。さらにまた、「エリザベス朝

の人々には発音の気取りがあまりなかった」(という)ことは、‘hair’の‘h’をおとして‘air’と発音すること  
も多かった)ので、ナッシュはそれを承知で、「二つの言葉がなんとか同時に聞きとれるようにするつもりであ  
ったとも考えられる」、がしかし、それでは実際にどのような発音で読まれたのかということになると、それは  
かにもく見当がつかないけれども、とエンプソンはその所説を苦笑まじりに結んでいる。

エンプソンがここで言及している「髪」と読む説は、R・B・マッケロウ(R. B. McKerrow)が、彼の編纂した  
ナッシュ全集第四卷(初版一九〇八年)の中でつけた次のような註によるものと思われる。

ナッシュはもともと、‘ayre’、と書いたものと考えたいのであるが、しかし、私にはどうも本当の読み方は‘hayre’、で  
はないかと思われてならない。そう読むと、より明白ではあるが、はるかに劣った意味になる。

マッケロウのナッシュ全集は、D・デイシャス(D. Daiches: *The Present Age*, p. 140)によると英文学の本文校訂  
の歴史の上でも劃期的な秀れた業績であるというし、現在でもナッシュの定本となっている。エンプソンは上の  
註を皮肉な説と受けとっているが、これを、エンプソンとはちがった観点から、真正直にとりあげようとしたの  
がカニンガムである。

カニンガムは、『伝統と詩的構造』の中の「ロジックとリリック」(*Logic and Lyric, in Tradition and Poetic  
Structure*, p. 57; 1951)とらうし、された題の論文の中で、マーヴェルの「内気な恋人に」(Andrew Marvell: *To His  
Coy Mistress*)やダンバーの「亡き詩人たちを悼みて」(William Dunbar: *Lament for the Makaris*)と共にナッシ  
のあのソングをとりあげて、これらの詩が三段論法(*sylogism*)をふまえたルネッサンス期特有の抒情詩である、)

とを論証しようとしている。

カニングムはナッシュのソングを論ずるに先立って、まずジョイスの『若き日の芸術家の肖像』(James Joyce *Portrait of the Artist as a Young Man*)の終末近くで主人公のステイヴン・ディーダラス(Stephen Dedalus)が、夕闇の迫るなかで瞑想にふけっているうちに、ナッシュのあの一行を、はじめは“Darkness falls from the air.”とまちがって思い出し、そのうちに気がついて“Brightness falls from the air.”であったことを思い出す場面を引用する。そして、この一行はジョイス好みの象徴主義的な詩句であり、ステイヴンの瞑想の中にあられるにはふさわしい。しかし、それ自体どんなにすばらしい詩句であっても、この一行はナッシュの原詩の三段論法的な論理(すなわち、真の幸いは不変のものである。しかるに地上の幸いはすべて無常である。ゆえに地上の幸いは真の幸いではない……という論理)の文脈の中では場違いに浮き上がった存在であることを指摘し、そこでマッケロウの註に言及しながら、「髪」と読む方は平明な意味しかないが、それにもかかわらず、この読み方のほうが前後の各行と同次元の命題として文脈にぴったりそぐう、という。そして、ナッシュのソングも、マーヴェルやダンバーの場合と同様に、条理であると同時に抒情である、とカニングムは結んでいる。

### III

上にみた三人の解釈はいずれも独自の説得力をもっているので、いまにわかに是非を裁断して択一をすることは控えなければならぬが、しかし、これらの解釈、ひいては問題の一行に多少とも側光を投ずると思われる材料をいくつかとりあげて、さらに考えてみたい。

(一) まずはじめに、カニングムの所説の導入部に言及されたジョイスの『若き日の芸術家の肖像』の一節を、



あらためてとりあげてみよう。すでにふれたように、あの一節は、図書館の柱廊のところに佇むステイヴンが、夕闇の中を去ってゆく恋人の姿を心の中で追いながら、おやみなき感覚の疼きに沈潜する感動的な場面であるが、ステイヴンはそこで、

彼女は夕闇の中を通過して往った。だから、しーっと低い声がしたほかは、あたりはしんとしているのだ。だから、まわりの連中もお喋りを止めてしまったのだ。夕闇がおりてきつつあった(Darkness was falling)。

といういわばモノログにすぐつづいて、ナッシュの詩行を“Darkness falls from the air.”というごく自然な思いがいをしながら想起するのである。そして、この詩句をきっかけにして、エリザベス朝の官能の世界に思いをさせ、彼女の肉体に思いをさせているうちに、ステイヴンは(いかにもジョイスらしいのだが)風のいるのに気がつき、その風を指でまさぐりつつ眼を閉じて、闇の中を風たちが光りつつまろびつつ落ちてゆく姿を想像し、そこで「そうだ、空から落ちたのは闇ではなかった。それは光であった」と気がつき、“Brighness falls from the air.”を正しく思い出すのである。

このジョイスの一節は、ナッシュの詩行について、二つのことを示唆しているように思われる。一つは、ルイスのように、あの一行を日没のときの光の凋落と解する場合には、“even-fall”とか“night-fall”という言い方と同じく“Darkness falls.”という方がより自然であって、それをあえて“Brighness falls.”というのは、写真でいえば陽画にたいする陰画を見せているようなものではないか。そして、陰画であることから、陽画にはない含蓄が生れるのではないか、ということである。

いま一つは、ステイーヴンの心のどこかに“Brightness falls.”という記憶がありながら、それが夕暮れ(even-fall)に出発して“Darkness falls.”という形で自然に想起され、さらに風によって一転して“Brighness falls.”という原形にかえるのであるから、“Brighness falls.”という言い方は、“even-fall”という非具象的な現象の少なくとも一面をきわめて自然に想像させる、と同時に、風であれ流れ星であれ、具象的な光る物をも同様に自然に想像させるといえよう。とすれば、両方の可能性はほとんど同じ程度ではないか、ということである。

面白いことは、カニンガムがステイーヴンの瞑想の場面を引用するさいに、八節六十行ちかい原文の中で、かunjんの風の一節十数行はまったく省略していることである。カニンガムとしては、あの一行がそのままでは“Darkness falls.”の陰画的表現であるという点を指摘して彼の“hair”説を強調したいがために、風という具象的なイメージとの聯想の部分は無視したのではなからうか。

(1) つぎに、『夏の遺言』の中から、多少とも参照の材料になると思われるものを一、二あげてみよう。最初にあげるのは、プロローグがおわるとすぐそのあとで歌われ、劇の主題をいちはやく予示するソングの第一聯である。

Fayre Summer droops, droope men and beasts therefore :

So fayre a summer looke for never more.

All good things vanish, lesse than in a day,

Peace, plenty, pleasure, sodainely decay.

Goe not yet away, bright soule of the sad yeare ;

The earth is hell when thou leav'st to appear.

美しい夏は衰え、それゆえに人も獣もうなだれている。

かくも美しい夏をもちや待ち望まぬがいい。

幸せはものなべて、ひと日を待たず、消え失せる。

平穩も、富も、快樂も、にわかにも果てる。

いましばしとどまってあれ、悲しい年の榮光よ、

汝が姿が見えなくなれば、この世は闇夜の地獄となるのだ。

「春の歌」におとらず美しいこの晩夏のソングでは、夏の凋落・終焉を意味する、'droop' (へdrop) 'bright soul of the sad year' という夏のイメージの核心に予想される太陽のイメージ、「幸せはすべて、ひと日をまたず消え失せる」というイメージ、などが重なりあって、きわめて漠然とではあるが、夏の終りと日の終りのイメージが重ね写しになっているように思われ、たとえば、

美しい日和はあと幾日つづくだらう。

夏の終り、日のをはり。

(津村信夫・「抒情の手」)

などを想起するのは、思いすぎであろうか。この印象が思いすぎでないとすれば、晩夏のソングの一聯は、

ルイスの解釈・夕暮れ説を、非常に婉曲にはあるが、傍証しているように思われてならない。

(四) ところが、同じ劇の中でも次のような一節をみると、また別の見方を示唆しているように思われる。

For Daphnes wrongs, and scapes in Theis lap,

All Gods are subject to the like mishap.

Stares daily fall (’is use is all in all)

And men account the fall but natures course. (ll. 516-519)

ダフネを虐め、テーティスの膝を枕にした咎については、

神々はなべてかような不運に遭いやすいもの。

星は夜毎に落ちます(それが常なることこそ肝心で)。

世の人も落ちるは自然の成り行きとか申します。

これは、登場人物の太陽(Sol)が夏(Summer)の面前に呼び出されて、その勝手気儘な振舞いや放蕩ぶりを咎められるときにのべる弁明の一節である。ここで「星は夜毎に落ちます(それが常なることこそ肝心で)、世の人も落ちるは自然の成り行きとか申します」という言葉には、夜毎とか、常のこととか、自然の成りゆきとかいう言い方があるだけにいっそう、当時の人々の流れ星にたいする好奇心がうかがえるのである。この劇には、別の所でも、登場人物の秋(Autumn)が、「星が落ちたら、それを踏みつけない者があろうか」(1689)という

のがあり、これら流星にたいする言及は、年代はわずかに下るけれども、ダン (John Donne) の見事なソネットを想起させるのである。

Go, and catch a falling star,

Get with child a mandrake root,

Tell me where all past years are,

Or who cleft the Devil's foot,

Teach me to hear Mermaids singing ...

行って、流れ星をとらえるがよい、

マンドレークの根に子を孕ませるがいら、

過ぎ去った年月はすべて何処へいったか、

また悪魔の足を引き割ったのは誰か、聞かせてくれ、

それから、人魚の唄うのを聴く術を教えてください……

この詩にたいするグリアスンの註釈 (H. J. C. Grierson: *The Poems of John Donne*, vol. II, pp. 11-12) によれば、この詩をふまえていくつかのパロディが書かれているのであるが、グリアスンのあげた二つのパロディとも、珍しい事象として列挙されたもののうちの他の事象には異同があっても、流れ星だけは必ずはいっている。

これらの例を考えあわせると、当時の人々にとって、流れ星は、われわれが想像するよりもはるかに目を惹き、心を惹く現象であったことが感じとれるのであり、エンプスのあげた光る物の中では、どうやら流れ星がもっとも妥当性が大きいのではないかと思われる。(エンプスのいう光る物のうち、太陽については、ふつう‘sun-fall’とは言わないが、落日という言葉もあるのだから、いちおう考慮にいれるとしても、他のもの、とくに鷹や建物の頂上の光る物まで含めるのは、すこし無理ではなからうか。)

(四) ダンといえは、ナッシュの詩行に関して、いま一つの詩が聯想される。それは、エリオット (T. S. Eliot) などが称揚した「かたみ」(The Relique) の一節である。

When my grave is broke up again

Some second guest to entertain,

(For graves have learn'd that woman-head

To be to more than one a Bed)

And he that digs it, spies

A bracelet of bright hair about the bone...

私の墓が掘り返されて、

誰か二人目の客を迎え入れることになり、

(とこごうのは、当今は墓までが、

一人以上の客の寢床になる女の性を習い知ったからだか)

墓土もつちを掘る男が

骨に捲いた見事な髪かみの腕輪を見つけたら……

ふたたびグリアスンの註 (*Bid.* vol. II, p. 47) によれば、ギリシアのテオゲネスという男が女から一束の髪かみの毛をもらって、それを腕に捲いて旅に立ったという故事があげられているが、その髪かみの毛は太陽の光線 (*sun's beams*) がこりかたまつたのではないかと思われるほどに美しかったという。ダンの詩の場合、女の髪かみの毛を捲いた男の腕は、墓の中ですでに肉が溶けて流れて、骨だけになっているわけだから、そのときでも女の髪かみが 'bright' であるというのは、実際には、色・艶つやの艶つやは失せて金髪かみの色いろだけであるはずであろう。がしかし、詩的想像としては、あるいは色・艶つやをともし指していると考えても、不自然ではあるまい。いづれにしても、ここで注目したのは、女性の髪かみの色いろ艶つやが生命や美の象徴として、これもわれわれの想像以上に、当時の人々の目や心に訴えるものであって、それゆえに、詩における約束事の一つになりえたということである。そして、このことはナッシュの詩行を「髪」と読む解釈を、カニンガムとはややことなつた観点からも傍証することになろう。

(四) さきのグリアスンの註では、女の髪かみの色いろ艶つやが太陽の光にたとえられているが、髪かみにかぎらず、女性の眼や頬などに輝く美しさが星や太陽の光輝と容易に結びついたことを示すよい例は、『ロミオとジュリエット』 (*Romeo and Juliet*) の一節ではあるまいか。

The brightness of her cheek would shame those stars,

ナッシュのソング「悪疫の時に」・私註

As daylight doth a lamp; her eyes in heaven

Would through the airy region stream so bright

That birds would sing and think it were not night.

See, how she leans her cheek upon her hand! (II, ii, 19-25)

あの女ひとの頬の輝かしさには、星たちも、真昼間の灯火のように、

恥じることだろう。天へ上ったあの女ひとの眼は

大空いっばいに明るい光をみなぎらせ、そのため、

小鳥たちも囀り歌い、夜を昼かと思うだろう。

ほら、あの手に頬をもたせている！

ここでは頬の輝きが星の輝きに、そして、眼の輝きが太陽の輝きに、なぞらえられているのであるが、これをみても、当時は、星や太陽の輝きも、眼や頬や髪かみの輝きも、ともに生きた詩的約束ごとであったことが実感され、たとえばエンプスンのように、ナッシュは‘air’と‘hair’を掛けて使ったのだという見方も、そう無理だとは思われない。

言葉にたいする熾烈な興味から、いわゆる‘pun’を好む傾向は、シェイクスピアをはじめ当時一般の風潮であったが、ナッシュもこの例外ではなく、『夏の遺言』の中でも、存分に言葉の機知を楽しんでいる跡がみえる。たとえば、登場人物の収穫(Harvest)が、‘Sickles’シクルズは‘Sick, sick, and very sick’シク、シク、そしてとてもシクと歌わせるが、「さうとさうと」がある(II, 851-855)。このように例をみると、ナッシュが‘hair’と‘air’をかけ言葉として使うこと



めおおつたたりとさうごすむ思われしへる。(また、上にあげた鎌たちの歌の 'sick' は、問題のソングのリフ  
ン・イン "I am sick, I must die." と響を合つて劇の主題に反響を与えていること、いふまでもない。)

(6) ひかひ、旧約聖書の「詩篇」(Psalms) 九十一章から、「暗闇に歩く疫病」に言及した数節を引いてみよう。

Surely he shall deliver thee from the snare of the fowler,  
and from the noisome pestilence ...

Thou shalt not be afraid for the terror by night;  
nor for the arrow that flieth by day;

Nor for the pestilence that walketh in darkness;  
nor for the destruction that wasteth at noonday.

A thousand shall fall at thy side, and ten thousand  
at thy right hand; but it shall not come nigh thee. (91, 3-7)

主はそなたを獵人やうじんのわなと、

恐ろしい疫病から助け出されよう……

そなたは夜の恐ろしい物をあ、

昼に飛びくる矢をも恐れることはない。

また暗闇に歩きまわる疫病をあ、

真昼に荒す滅びをも恐れることはない。

ナッシュのソング「悪疫の時に」・私註

たとい千人はそなたのかたわらに倒れ、

万人はそなたの右に倒れても、

その災はそなたに近づくことはない。

ここでは、疫病が暗闇の中を歩きまわるとあるが、ここにいる暗闇は、その前の一節の夜と昼の対句と同様、真昼と対句をなしているところを見ると、やはり夜の闇であって、疫病が一夜にして人を倒すという古代の人々の印象を伝えているのであろう。もっとも、「真昼に荒す滅び (destruction)」も病い (sickness) と解するのが普通のようにあり、『祈禱書』(The Book of Common Prayer) では 'sickness' となっているし、ナッシュのソングの第二聯第五行には「疫病は足早に駆けてゆく」(“The plague full swift goes bye”)とあり、これは、夜昼となくつぎつぎに多くの人々を倒して駆ける疫病の姿を彷彿と伝えている。しかし、いまこの「詩篇」の一節を念頭において、ナッシュの第三聯の詩行を考えると、ルイスのいう夕暮れの悲哀感よりは、もっと切迫した恐怖感をいだいて、迫りくる夕闇を迎えずにはいられなかった当時の人々の心をあの一行が伝えているのではないかと考えられる。とすると、ルイスの夕暮れ説は、すこしちがった意味からも、傍証されることにはならないだろうか。さらにまた、「詩篇」の暗闇を、必ずしも夜の闇ととらないで、広く比喩的な意味にとるとすれば、エンプスのあたかも印象派的な解釈、すなわち、疫病流行のときには、(真昼でも) 大気に一抔の暗さがある、という感じ方も、妥当だといわねばならない。

(4) 最後に、ナッシュのあのソング自体の最終聯をとりあげてみよう。というのは、それが、エンプスの天与・慈光説の背景になっていると思われるからである。

Haste therefore eche degree,  
To welcome destiny :  
Heaven is our heritage,  
Earth but a players stage,  
Mount wee unto the sky.  
I am sick, I must dye :  
Lord, have mercy on us.

さればこそ、低きも高きも、  
急ぎ定めを迎えたまえ。  
天はわれらに遺されし郷。  
今生はあだなる舞台にすぎぬ。  
われらはみ空に昇りゆかん。  
われは病み、わが命きわまりぬ。  
主よ、われらを哀れみたまえ。

この一聯については、エンプソン自身が、同じ『曖昧の七つの型』の別の箇所 (p. 115) で、対立する観念の並置による意味の多重性という観点から分析を試みている。それによると、この聯の結びの三行の第一行 “Mount wee unto the sky.” は、「キリスト教の霊魂不滅の教えにたいするあまりにも全面的で純真な信仰を表明しているのだから……一種の異教徒的な尊大さと誇りをささえ感じさせる」が、つづく一行 “I am sick, I must die.”

は一転して、「肉体の弱さと死とに直面した自然人としての人間のまったき恐怖をつたえている。」そして結びの一行“Lord, have mercy on us.”では、「これら二つの要素がキリスト教独特のあり方で深い謙譲へと融和されているが、その謙譲はあまりに深く、神の愛を識ることにくらべれば、個人的な霊魂不滅の望みなどは附随的な末梢事にひとしくなってしまう」という。

エンプスのこの分析の是非は別としても、あの最終聯には、天と地、神と人との間の絶対的な落差にたいする深い意識があり、その意識の底から主に呼びかける者の眼は、窮極的には、天に向けられているといえよう。第一聯から第五聯までは、地上のあらゆる幸のはかなさが執拗にことあげされるのであるが、それが、一方においては今生にたいする烈しい愛着の声であると同時に、他方ではその愛着を断ち切ろうと自他に呼びかける鎮魂の歌であることは、最終聯にいたってようやく決定的となる。

問題の第三聯第三行を、このような内面的な流れの中にいまいちど返してみると、(マッケロウの仮説の妥当性が再認されることは別として) エンプスの天与・慈光説の妥当性が多少とも増すのではなからうか。というのは、彼の慈光説は、物理的な意味での天地の距離のみでなく、神と人との落差をもっとも強く意識した解釈だからである。そして、エンプスの慈光説が、最終聯にたいする彼自身の解釈に暗に立脚していることは、無論のことといわねばならないであろう。

#### IV

以上いくつかの観点から、ナッシュの詩行とそれをめぐる代表的な所説について推考を試みたのであるが、ルイスの夕暮れ説、エンプスの天与・慈光説、大気汚穢説、(格別の例証はあげなかった) 天変地異説、

(光る物説の中では) 流星説、カニンガム・エンプスの頭髮説、そしてエンプスの天空・頭髮兩義説、のそれぞれが、一理も二理もあるのみならず、独自の角度から想像力に訴えるのであって、いずれにもわかには捨てがたい。

カニンガムの説くように、当時の抒情における発想の型と称しうるものをふまえ、マッケロウの仮説をふまえ、ソング自体の統一という観点から、頭髮という読み割り切つてしまえば、それがもつともすつきりした読みになることは、複雑・緻密な心性のエンプスならみとめるとおりである。しかし、これには本文校討の問題がいぜんとして残るであろう。のみならず、ルークがその近著『抒情の衝動』(The Lyric Impulse, pp. 11-12)でいっているとおり、たとえばナッシュのあのソングやシェイクスピアの『あらし』(The Tempest)の中のソング“Full fathom five thy father lies.”のように、“エリザベス朝の(とくに劇中の)ソングにはしばしば、そのソングの内的統一や平衡を破るほどに卓越した詩行が含まれているとしても、それらの詩行の斬新、大胆、または幽玄な隠喩は、ソング自体よりは、むしろ、ソングの母体である劇そのもの、すなわち、当時の劇作家たちの奔放な想像力の所産である劇という母体から結晶することが、当然予想されうるものであり、また、劇の文脈がそういう暗示力にみちた詩行を要求したということも、否定できない真実であろう。(一見、単純な択一とみえるルークの所説にも、それ相応の配慮があったことは、いうまでもあるまい。ちなみに、ルークは、彼の旧著『詩への希望』(A Hope for Poetry, p. 80)における言及からもうかがえるように、エンプスの『曖昧の七つの型』を高く評価しているのであるから、ルークの見解はエンプスの解釈をじゆうぶん承知の上での択一であることは勿論であろうし、同じことはカニンガムについてもいえよう。)

一方、同じく空の光と読むにしても、ルークの夕暮れ・悲哀説は、(いまのべたように当時の劇作家の想像

力の特質にはじゅうぶんな考慮をはらった上で、時代特有の思想・感性よりは、むしろ、時代を越えた不易の人間の情感に立脚しているのにたいして、エンプソンの解釈は、いずれの場合も、当時の感性、宗教観、倫理観、言語現象などの背景をより重視しているものであり、その意味では、両者は対照的であるといえよう。

エンプソンのように、少なくともあの詩行に関するかぎりは、択一的であるよりは包括的・懐疑的であろうとするならば、多様な見解を同時に反芻するほかはない。しかし、ルイスのように自己の感性・直観を確信し、かつその感性を納得させようとするような択一をしようとするならば、当時の世界像や、感性や、想像力などの背景をより深く、広く探り、その上に立って各自が、「奔放な推察」(a wild surmise)を試みるほかはないのではなからうか。

〔註〕

ナッシュの原詩の引用は、マッケロウ編集のナッシュ全集(*The Works of Thomas Nashe*)第三巻により、古い綴りのままにしたが、文中での短い引用は多くの場合、便宜上、現代綴りにあらためた。

The Song

Adieu, farewell earths blisse,

This world uncertaine is,

Fond are lifes lustfull joyes,

Death proves them all but toyes,

None from his darts can flye;

I am sick, I must dye :

Lord, have mercy on us.

Rich men, trust not in wealth,

Gold cannot buy you health ;

Phisick himselfe must fade.

All things to end are made,

The plague full swift goes bye ;

I am sick, I must dye :

Lord, have mercy on us.

Beauty is but a flowre,

Which wrinckles will devoure,

Brightnesse falls from the ayre,

Queenes have died yong and faire,

Dust hath closed Helens eye.

I am sick, I must dye :

Lord, have mercy on us.

Strength stoopes unto the grave,

Wormes feed on Hector brave,

Swords may not fight with fate,

Earth still holds ope her gate.

Come, come, the bells do crye.

I am sick, I must dye :

Lord, have mercy on us.

Wit with his wantonnesse

Tasteth deaths bitterness :

Hells executioner

Hath no eares for to heare

What vaine art can reply.

I am sick, I must dye :

Lord, have mercy on us.

Haste therefore eche degree,

To welcome destiny :

Heaven is our heritage,

Earth but a players stage,

Mount wee unto the sky.

I am sick, I must dye :

Lord, have mercy on us.

(from *Summer's Last Will and Testament* by Thomas Nashe)